KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Centimetres
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

3149
9

べ13
3149
9

朝顔日記巻之七　故芝叟遺話

柳浪　著

十七回　蟲

大内介殿いろ〻思召けん遽よ駒澤ゞ閉門ゟ免さゝ冷泉帯刀ふ釣け置せたまへ。然よ那の遺失ゟ責問をべき狗藤内ハ二夜獄ゟ越て晦跡たり。帯刀等不意よ喫一驚して。慌忙しく幾隊の快手ゟ走らせ。四面八隅草ゟ分ちて捜捕せけるさて這の緊要の遺東西といふハ。真武聖帝の尊像よして。黍くも當家の曩祖琳聖太子。高麗の國よ至齎せ渡来たまひしゝ長く家の守護神と崇へたまふ。從来奇異の霊験在により。時と称く紫禁よ至大内氏よ鳳詔くだり。即這尊像と廟堂

設けらるゝ。妙見霊符の大醮を修さゝるうたまゝ。その穣法ハ代々
當家の主たる者。修め来るゝ。先項那の尊
像の一軸失て。何者の所為とゝふことを志らず。倘もこのこと
禁廷ゝ洩聞えあれバ。由くき家の大事ならんと。長臣の們
眉をひそめ。各安き心もなし。先是駒澤ゝ寛の難題を云
かけたる修験伽縷羅院といふハ。這の國の僻處三田尻と
ゝ地方の民なるが。一個の母親ゝ事て至孝なることいふ
ばかりなし。こゝを兄弟德兵衛と喚做者を。隣郷なる做
敗布的何某が入贅ゝハしかり。母ハ生得ていと古怪き
好潔の毛病あて。平素ゝづから洒掃のゝをこゝしゝ。そ
飲食の類もいさゝか不如意ことあるをバ。その〻嘔逆

發して。終日絶穀さるもまた多かり。伽縷羅院ハ深く是と
歎き。只顧母の業舞。掃除ハ勿論。飲食ゝんどゝのかぎり
叮嚀ゝ物しつ。されど自来その家貧しく母を豊ゝ飼養
ことあたハず。母の嘔噦發るごとゝ涙を流し。自己が孝養
の煖飽不得と歎息せり。おほよそ知音の人ゝ對時ハ滿腔
子ゝ誡める遺憾を洩し。あハを一二百両の金子もがる母を
安楽ゝ養ハんものと。今よりあれ大金を損して。人命を
購むる人もあらバ。己がの一命と交易たきもあらんといと
皺面ゝぞ語ゝる。さるほどゝ山岡玄番允ハ。己が大望の妨
るゝ。駒澤次郎左衛門と仆て墜さんと。多方計較てありゝる。
先是在京の時色慾の為ゝ散財出醮。荻野祐仙自先山岡が

郎ゑも親炙附翼せしが。忽日来て物の序ゑ道やう世ゑハ希有の望せる獣呆し侍て。近来小的許ゑ請治ゑ来る三田尻の者ゞ申をふハ。それゞ街坊ゑ伽縷羅院といふ修験あって。てゝふとゞ孝心の者ゑ侍るゞ自己貪しく母親を養ゑ不如意ゐるふより。自然好事の人うて大金もて交易んと望まバそのゝく性命を沽んと申すよし承ハてき。と無心の雑話を。心ある山岡云番聞よりも。計頻ゑ心頭ゑ上来らゐ。あい最屈竟の事ゑりと。隨即祐仙と閑處ゑまゝき。何事ゝ密語とゞ恥ける。舊這の祐仙も。駒澤と戀の敵と深く嫉ゑ。蛍ゝ山岡ゞ逆謀ゑ荷擔せしゝ。今山岡ゞ吩咐をバいと容易領承ぬ。ゝて祐仙ハ詰且蓐食て。山口の府下をたちいで。只管西と望んて走ゞゝるゞ未牌ゑいとや三田尻の附郭ゐる出村といふ地方ゑ鎖とある茶店ふたちゝて憩息其許の店小二を央ゑ三田尻の熟人へ折簡ゑ齎せ差しゝゝ。幸宿ゑ在けるゝ待程しもゐく。那の伽縷羅院ゐる者出来ぬ祐仙ハ欵待し在つまバやとら酒ゐど請め。いと寛語たふゝへ。和僧ハ憑金ゑて命ゑ沽ゝと聞侍しゞ。そハいゝ實定ゑ侍るゝ。今爰ゑ百両の金子あり。菲儀ゑても承引たまいゞ商量しゐひねといハ。伽縷羅院聞て。こハ從来望知ゝる百金をゞゑ賜らバ如何ゑも愚僧ゞ狗命を購申をゞしといと苦もふげゑ允容それバ。祐仙ハ最早く事就と悦び。和僧の命を買得由ハ緊隠密ゑて壁耳と憚るゐゝそハ施主ゝゝ直ゑ聴る

べしいざさらバ斤時も早く伴い歸るんと。忙ハしたつる。伽
縷羅院。さバまづその金子と收落申し。一回弊院ゑ帰り
舎京ゑ百般付属とき。闔家の眷ゑも這の金の出處ゑ
怪まざるやうゑ申しきうせ。直回して来りゑんとて。祐仙
いさでうゑ惹東西ゑきバ。その飜悔せんことと放心不下て
半晌猶豫状ゑる。伽縷羅院熟視て。今日ふん邂逅
夙志ゑ遂たるゑ。自然變卦ゑも遇んうとほどくあやぶ
みやきら店小二を呼たて道やう。愚僧些の仔細ありて。
那の醫師殿ゑう為替の金子ゑ拿帰るゑう程ゑく又
来りてその事を辨じ侍るゑ。露ごろも齟齬いさふらハ
ず。要時往来の間ゑどい。和主こをと為證てたびねと諾

托けるゑ。店小二ハ恒ゑ伽縷羅院ゑ篤實ゑ熟識居きバ
快よく允ゑひ。祐仙ゑ對ひて種く附語をゑをふう。祐仙
も只得承引てゑう。伽縷羅院ハ祐仙ゑ迎せる金子と懐ゑ
きて。這の茶店をたち出。直ゑ本院ゑうまうて道るいさて
も今日ハ造化ゑることとそゑきを。待バ甘露の日和ゑとふ
ごとく。今般皇都の土御門家ゑう。扶桑六十餘州の陰陽師
どもの系譜御紀しゑて。胡論ゑるものハ没入らき正道ゑる
ものハ牌符と下さゑ小。或の吹噓ゑ由不思議と市看顧しゑ
遇う。我へハ鎮西道の査差ゑ赴るべき金ゑ蒙ゑきそれゑ
ゑきさる御幹ゑて遽ゑ召きバ唯今ゑう鳳闕と指て起程侍ら
ゑう。調度どもハ日後申し下をべしと。一曩の百金と居ゑハせ

たる徳兵衛よ遁し。這の支度金ハ汝ゑ付與ふくぞ。起先孺人へ邦不自由させまゐらせし代り。什広ゐうとも好ませ給へ東西とも買へて請まいらせよと。ねんごろゑ托れ。母へも告別を形し。上洛せんよハ影の二光とも送るゑん。好く信ゑ在せ。ゐぐ發跡て僧都とゐうて發旺歸省ゑ待たまへと。口裏よハへど肚裏よハ。さを今世のゐれと思へバ。涙盤渦来て胸うち潰たをど。不悟まゝと衣紋刷くゝて紛らしつ。母も餘波ハ惜しゐれども。愛子の出世と聞うらゑ。ともあらバ早く都ゑ還り来て。老ゐ倚門心を慰よと。離の盃酣うハし。大家啓行を見雛しゐ。その後伽縷羅院ハ金主の山岡ゐ命を守ゑ。駒沢小寃といひうけ。渠ゐ分説の滅口し。舌噛切て死なるハ財の料とい

いひるゐら。無慙とゐも惨ゐう三田尻ゐる母ハかくといざ知ず朝夕陰の膳ゐ排。指を折て日を筭へ。その消息をまちうね只顧その風声のゐして想ひ煩ゐう。又這の修験ゐ茅徳兵衛ハ義家の双親早く亡て。その妻阿茂と乳臭児と。嫡親三口の過活ゑて。些本銭ゐる木綿商買の牙僧ゑ閑まく。伽縷羅院去て後ハ實母ゐ已ゐ家よひきゐうて。阿茂と共ゑ待き事ゆ志うゐ頃忽然として徳兵衛母子一般の異病を受て悩ゐう。毎日午後ゐう悪寒して大熱ゐ発し。遍身疼痛ゐて宛ゐも蝮蠍よ螫ゐくゐぐ。異常痛風ゐるゐぞ。来ゑ診ほどの醫ども。一個として什広の病因とゐることを言ゐぐど。ゐるゐ中ゑ老功ふる一醫熟察して。両個の病者ゑ礬水と飲しめ。まゐ生豆を食せて験るゑ。母

子ども憇美とうち食て些も腥らぬ形容あり。老醫ゐれを看て。原来疑もあき邪崇ぞう。中く藥石の治処ゑ非ずとゝ。看病ゑ在あゐ瓜葛の者ども膝をくめてさもうらべ如何ゑして佳んと議るゑ。老醫いへらく。凡鬼注ハ加持祈禱ゑて禳驅ことハ多う。ゐれども何の邪魅とゝふことを知ねバ。験者もせん法ハあゝじ。足下達も聽をしゝ。這茀土御門家の内ゐる佐伯少進入道一清軒といゝ者。山陽道陰陽師査の役者として下らも。萬代沼村の庄官ゑ寓て居らゝが。その易断鬼神不測の妙ゑうと風聞せり。こまゐかくまゝ那人ゑ筮判を請ゐて見らゐゐ。根由も解まんと勸めけるゑ。徳兵衛ハまをとゞまて。萬代沼ハ僅半里ゑたらぬ所ゐる。朝醒の間ハ精神も行歩も常のゝくゐ。一回往て乞てんと。黎明をまちて。夫婦もろとも稚兒を携萬代沼の庄官が許ゑ至り。一清軒ゑ謁て。自己母子が難病の状をほげ慇懃ゑその明断を請る。一清軒容易諾。即坐卦を起ふ山風蠱を得たり。一清軒眉うち皺め。コハ山風蠱として。三毒盤上ゑて相食の兆あり。熟卦面を味ゝゑ。是必足下達の骨肉ゑ。大隠匿の惡業を做しゐるその天罰的顱ゑ中ゝて殃ゑ罹るゝ。その惡業を造ると云ハ。今天下ゑ名たゝる有道の大賢人を寃の罪ゑ賺さしめたるとゐばもるぞ。天道ハ善ゑ福し惡ゑ禍す。その賢人ハ天ゑ應じ人ゑ順がひ国を富しめ民を愛せる善行あるゆへ。上天心ゑ應たる徳者ゝ

左氏傳
周易本義

本綿屋清助
易國文

志うろと凡愚の身として悪を興し、その人を害と做したる餘の殃はみなそなが眷族に及ぶ。おを全く天公の所悪深きる故なり。今筮の兆に據バ不小可毒祟なるべし。足下母子とも。早些那の賢人の寛と雪人と苦思深切ふらバ。蠱の毒勢稍緩つべし。登時下官が家に秘たる法を修して。両個の鬼注祓禳除て與せんといふ。自来老實の木綿屋徳兵衛これを聞て信疑相半。谷粘に申をやう。先ハ筮考たまふ感激侍る。雖然爰に一個の不審のあり。賤人が骨肉の者にあらず起先露不仁無道の悪行を做せしもの覺侍らず。とのひ出すを。一清軒とや不消分説て。非學者論に喻ずといふあり。今徒に争論も詮なかるべし。早く回りて母儀にも量見玉へ。中意事も出来るんといひ捨。餘の来客に應對しつゝおの時とや請筮人夥集合バ。徳兵衛夫婦ハ一清に對て厚く謝祓演。一封の筮儀と措て起いづかくて徳兵衛ハ家に帰。母に一清が兆の説を語る。母も一向不會せず。一清軒殿の易術ハ。百斷百中しい声言せども。只此ハ不占得なり。先闔門にて試説見しに。長児の伽縷羅院ハ。虫も殺さぬ誠實もの。海達夫婦の孝敬厚江ハ。ふの老が肉眼に水ぶくれ絮語らら。早午の貝吹比もなりて例の寒熱去来りして徳兵衛と一時に。遍身毒虫に噛るがごとく。痛疼さて悶苦むこと常に倍せり。徳兵衛が妻の阿茂ハ種々介抱して在しが。やとらつと起て抑眉朝天眼血

黙て罵ら〻。余と誰とかゝ加縷羅院ろうぞよ。我痴はし
て只一途よ。孝養の為よと。双親の遺體ゐろ性命と代よ
知ぬこゝいいひゐがら。悪人の大逆よ荷擔し。精忠至善の
賢者とび。我故よ寃の難よ苦めたり。その業孽輪轉をう
〻〻報来て。死てい泥梨の地獄よ墮、剣山氷池の刑いさらふ
て。無量の苛責よ苦むぞよ。やよ舎弟いざ我よ替りて。疾那
賢者の寃と雪せよ。とあらば罪障頓よ消滅し。冥府苦患
と解脱せん。コハ悲しゝや火の車よ載て往ハ。あら熱や耐ず
たやと。吽も敢ずお茂い度と仰倒よたとれて。半晌不省人
事ぐりり。母子ハ毒氣の和時よて。いの挙動ゑ看ヌその
饒舌と聞て且驚且悲今こそ一清軒ゞ説ところ。露ぐろも

違ハざるとハ。共よ渠ち明斷の物然ゐると感じ。天明を待かね
使を馳て一清軒を請じるよ。一清軒轎よ坐て入来まハ。德
兵衛ハ礼〻しく出迎て草廳よ請し。席よ額を突てろら畏
妻お茂ゞ死霊の附語を青天白日よ告大人の明斷と符合
せしハ。よし凡人よい在ざし。と昨日の不敬を謝て。小人母子
ゞ邪祟とぞよ禳除王いるバ。時日を移さず。賢人様の雪寃
と議れゝんと慇懃よ請けまハ。一清ハ德兵衛ゞ誠心ゑ好して
いまと允ゞひ。やゝら重くの俎豆を排へ。燧火を點させて。增よ
登て。ふゝく丹款を凝し。泰山府君の法とぞ修したりる。前よ
てとでよ熱発て。遍身とや痛疼出んとせし例刻ゐろよ。不思
議や那の穰法の奇特あらまを。德兵衛母子ゞ蠱毒立倣ゝ退

散して。苦痛ハ之の餘波も揚ずおさまて。心神爽さと日比ゑ
優まて覺る。骨肉のものいさらおろ。坐ゑ在かぞうハ擧合て
雀躍ことかぎりなし。老母一清。對てその勞ゑ謝し。今迫
ハ不今意侍ゑしが。児子伽縷羅院といへる修驗。土御門様ら
西國方隱陽師査の役ゑ蒙て。俄ゑ召まて帝都ゑ上り候し
が。一別弗ゑ音耗を聞侍こず。貴客ハ土御門家の御差使と
承りくべきこば。豚児と一般御任おり。定てその事知召まん
若ハ大人の御吹噓ゑやあらんどらん。昨日娘ゑ附語ゑ豚
児ハ黄泉客とおりしと聞る。老ハたぐ不小可れ亂て
侍るゑ。とい干係げゑ問うけらき一清軒殆訝ゑ陰陽師
等の査差ハ。下官その惣裁判の蒙きば。大八洲内きゑ

于て知ぬとゆことおし。令郎の名さへ今が承て初るろ
ゑ。そハ可恠ことおきと。半晌沈吟せしが。掌ゑ端とうちて
呀原来卦の兆おろり。令郎いうゑ篤實の質おりも人
の為ゑ欺負まて罪做せらきしも計らきず。といまぐ語も
果ざるゑ。稠人廣坐より誰ゑハ。大人の御語ゑ仕きて
思ひ得せ事のい。頂山口の御館ゑハ。什庄の御紀明ら一個
の修驗者を責殺し給ふ由。適間きの風説とうけたまいり
きと。道出せり。かくろ時の習し。古怪の叟が。ゑれハ這家の伽
縷羅院殿平生の口吹ゑ。ハ命薄ゑて斯貧寒過活バ母と
安樂ゑ養ふこと遂ハず。あハき今世ゑ大金と損して命ゑ
買んとゆ人もあきが。一員の舍弟持られバ。母と看顧ゑ

事を欠ず。我ハ命を縮めても親ゑ不自由ゞさせじとおもひ
謂らきたゞと。骨だゝ肩ゑ聳してのぞきるゑ。又ある農戸ゞ
伽縷羅殿ハ前日出村茶屋ゑて生ぬ醫者殿と坐久對話
せらるゝ一包の金子をも拿歸らるゝゞそきゝ見うけぬ
ぞあやしゝれと。店小二ゞたぶやきたゝと居丈高ゑ申ゑ云
さいぐ。母ハ適間よりもの種々の言説ゑ聞て韓し胸ふさぐり
餘の悲さゑ涙さへ出もやらず。歯の透と漏声のいと澁枯て
さらばその責殺さまるる優婆塞ハ極て豚児の伽縷羅院
おらん母と養ふハんとの健氣ゑ誠心もいらゑ孝行ゑをバ
て。命と活とゝやうふるいとゞゑるものゝとい知らゞして
中くゑ。珍膳美食も児の肉。見るも可悪聞も否。今の數ゑ

比へてハ。錦の襁も鍼の筵。おもゞが安樂どゝろゝや。残喘なる
きゝの母も。利那ゑ遅つくぞよ。情ゑき長児がゝくろや。孝行か
へつて不孝とゑるしぞ。宜も門を出しゝぞぶゑとゑく。そゝ
後影の透て。物哀ゑ想ひしハ。ゝくる憂目ゑ看人識ゝふもへバ
想へバ惨酷やと。展轉て泣悶く。徳兵衛夫妻も共泪と
ゝそゝりて母親を介抱。種々と慰ゆきバ。流石老人の
例。後果ゝも志淺ゝらず。徐ゝ涙を歛て。一清軒が膝方に
蹲ゝり。既然死者ハ悔をて回らず。やゑ徳兵衛汝も亡
魂ゑ托語たる悪人ぐらの隱謀を顯し。賢人様とやらん
の寃と雪ゝまいらせよ。亡児が為ゑいこをゑ優ゑ供養ハ
あらじゞぞ早く冥府の苦患と助やゝ。又眼底ゑる仇とも

報ひとし。易よと一清大人。爾せんよい何如よして可ん。その風狀よ易るべきまと。次児ゆよふ易委く訓へて給いまと只顧たのむよ。一清いまを易うけがい。又互卦ふどと併せ考へ。徳兵衛と近づり先方位ハ這里より東方よあたりて程近く大都會と見ゆまをバ。極てさいを山口ゆり。さあをバ早く山口の検断所よ出訴と易して。令郎の命と活をたゆ縁由と上票對手の検査を願ハまをふバ。必勝利うとがいを。その所以ハ山風蠱といふ卦ハ。内卦ハ風外卦ハ山ゆり。往古周の代よ秦伯といへる諸侯あり。その國の東よ隣る晉ゆ國を討んとて筮してハの卦と得たり。秦伯こを見て蠱ハ忌ゆ兆ゆ。をバ今度の軍まづ止んと議せらをゆを。易者曰やり。吉し

時今秋ふをハ。西より東よ之よ利し。外卦の山よ内卦の西風吹中て。その山の枯葉を吹散す象ふをバ極りて御勝利あるべしと斷ぜしゆバ。秦伯ゆれよ同意して晉ゆ討こ大よ克と得らをたるその例もあをバ今足下の對手どらるべきハ。十分猛烈ゆる大敵ゆをども。その運數斷盡なり且山口府ハ這里より東の方ゆり殊よ今秋の末ゆをバ西風山の凋葉と吹掃をゆ。速ゆよ工成べし。如あをど其間よ不意驚駭よ奏巧ハとあらん。不妨ぬことゆり。そハゆと勿恠の僥倖とゆりその事よりして令兄の屈死の縁故も明白賢人ハ雪寃て世よ出らをて足下もやとその人の庇よ由好造化ふ遇るべしかゆらど疑ハゆゆハと勿をとそいてゆる。

十八回　狩

雲は龍に從ひ。風は虎に從ふとて明君と賢臣と一時に奇遇ること。世に希有例なり。大内介満興朝臣はその初猛烈の君なりしが一回駒澤に諷諫に容ひさせ給ひより遂に武文兼備の名將とはなりたまひぬ。さきば駒沢に学び得らるる政要ども已に所行きて。分國の軍民總てその徳仁澤に浴るふとは知召さ猶且は渠に授ぜる兵法の機變を試さんと俄に仰出さきて。三田尻の奥なる猛虎嶺の裾野に射獵を催させたまふ。當日は介殿まだ夜深きに館を起行あそて御頭に飜花の裏箔の笠子を戴き猩々緋に蜀錦の玉縁志らる陣外套を穿け背の小箙には數の鵜矢を納め。あさら

の行騰を着月毛の駒に跨ぜ。一手に繁藤の弓を拿せらきて多聞樓の下に半晌立せたまひて前面を屹と眺望したまへば。侍衛の人くいさらるる陪從の士太夫次叙ふ准て歴々と綺羅星宿のごとく蹲踞たるぐ。軍馬ともふ些の声响をさへ做さずいと森々と嚴粛そる狀は洵に紀律の中度なる由そとおぼゆ。駒澤は希代の軍師ふそと。暗く称奇在してそのまま腰なる軍配扇を抽とそ御額に翳し給ふこの太骨の消金の扇に朱の日輪を描たるに恰好東の天ようさし登はくうち匂へる嫩紅の影と相映て目も綵なるまで暉くぞえたり這は改觀と看るもの あり或は好奇こと做したまふよと冷語ものもありて。一軍

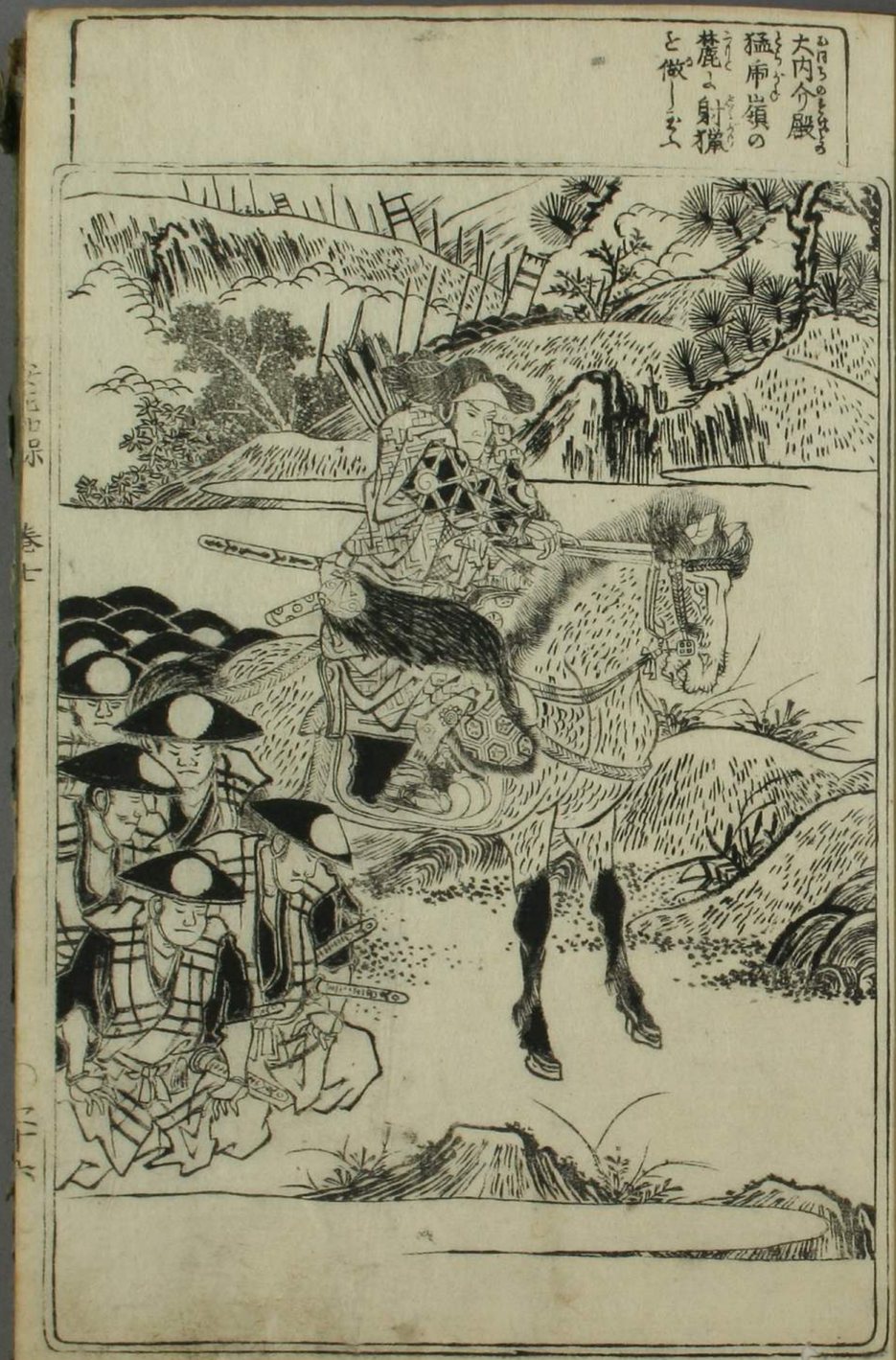
總て恠こ駭うぬものも和うる。大内介殿ハやとら手納うひ
う徐く騎歩給ひるよ。猛帛嶺の山脚まで三里餘の路
上弧窕も武者押のぐく。隊伍整くして聊も乱を間ひとく
ふと和し。かくて設の御假屋ゑ入せらまて。要時御憩息の
らせらまぬ。登時午影戴笠あまバ。くや御晝飯喫しめ
さるらんと隨駕和る長臣輩ハ鞠坐の光景を覘奉るに。
殿ハ將几ゑ坐まるぐら。御手自佩糧とてふくやう和る漆
包を披うせらまたるぐ。只焼飯ゑ香漬と乾肉梅とのみう
殿ハこまと甜美と喫させ給ひ一杯の馬柄扨の水を飲せ
らまてたるを見よう。人く呆まどひ。且慚且怖て齎
せ来まる行厨ハ美味を悉せ〜さと和まバ。君前ゑ出す

ふとかるハず。倜々たぐ空腹を抱て躊躇居るゑそ、殿ハ最
恠しと思し。汝等什麼故ゑ午飯を喫べずして猶豫居ぞと
曰ハするゑ。冷泉帯刀衆ゑ抽て。臣等ゲ輜餉いまゞ来れハずと
稟あく。殿聞し召まて。そハさぞ迷惑るべし。と即近臣ゑ命せ
たけられ。臨時御豫慮ゑ准備せさせたまへる佩兵糧ぐも瓦
駭しく運び出させらまて。人くゑ頒與へ給ひる。人く感激し謝
稟あけて。いと珍らしくも粗食を和ん喫べる。因ゑ人ゑ後来ある
卯月の初つうさ。櫻川の水上環翠ゲ潭とへへる所ゑ漁を催させ
たまへ。這櫻川の溢鯣ハ。山口の北畔和る曙山弥勒ゲ嶽埜高麗
山〜ゲ落合て巨浸と和し。外郭の左側と流る大河ゲ。比先ハ。
去の川年く洪水溢まを。両岸の隄ども那邊這方決て。沽河の麗

畝と壞けるかへ。こゝを纏へる邨落ハ狹を被ること不ハ可。かゝれ
バ河砂ハ左右の隴畝より高きあと幾丈餘よおよづりぎつりうに
駒澤次郎左衛門ハの禹功を役ゑ蒙りしふぎゞ源ゑる彌勒が嶽
の赤瓦ゑ雜木植。まこと曙山望高麗山の伐疎たゑ間ゑも
萬千の樹と植副以後て杣父樵者の入ことと堅禁せしゑ。
那の諸山年ゑ經て欝葱と繁くたち畢ぬ。ゑをゞたりゑ三
伏の日ハ雲氣凝濕て。時とゑ〻白雨と降しゑるかへそれゑ
ハ更ゑ旱損の患ゑることゑるゑ。又源流ゑる土砂のくぼを
ふゞゑることゑらぬハ大雨後水の激勢ゑ從て自然河底鑿通
て當初のごゝ底深くゑるゑふゑ。或ハ駒澤ゑ問て曰く。足下
の治河せうをしゑる。修堤いち早く成きゑるのゑまらず。四

決壞ことゑるきハ比類ゑるき手段ゑゑと深く感服たゑふ駒
澤道やゑ在下として別ゑ奇き策も侍らず。唯その各處の父
老どもの才勘ゑる者ゑ簡。そゑをゞゑゑ任て令とゑし侍
しゑる父老どもゑ告ゑハ明日の公役ハ馬蹈を修ゑふ土カ作
ゑゑをバ人夫ハ何の村ゑ充させたまへとゑふ又その明日ハ根廻り
と堅むゑる力作ゑゑをバ某地へ出夫ゑ觸させ給へとゑゑ。そゑを
等ゑ指せゑる處の民と役使バ。極りて成事ゑゑるゑ。ゑとゑるにハ
耕耘ゑゑ熟せゑるものと夫ゑふゑ。石材木ゑど搬運ゑハ山手
の斫石ゑどゑ馴ゑるものと使ゑ空作と做さぬゑへゑ。若ゑ
けんと對へゑゑき。さても大内介殿ハ環翠ゑ潭ゑ赴ゑせた
まへ舟行ハ湖泗て迂遠ハ例の御馬ゑ召ゑて。こやその地方

を臻を見たまふに那の環翠が潭とゝハ大きやうなる豬ホて
雄手雌手の翠壁ハ宛も削を成がごとく、緑樹ハ孫が上に
たちこめそをり間〳〵白躑躅映山紅の類爛珊て美きゞ趣
ありて画を描ともおよばじ。恠の巖の灣曲まへ紫の幕絞せ
たる大座船と繫ぎてあり。るハ御還の支度なりける。那里ホ嶋
あり方二丁ばかりの芝生あり。今日ハ日もよく晴て松ふく風いと
もゞしさの時影の漁戸どもハ、嫩鰷の群来りて瀑の汲を登る
とて、或小柄網もて奥より流を出る残花と共に汲ひあぐる
多業の好光景くまこ潭底より大偉き鯉魚を左右に掖
ぜさして泅あがるもあり。いと興ふかし。殿ハ芝生に五色の
花氈と敷せて、銀の茶行厨描金の携盒ども、光絲奪目に
水陸の珎味玖悉さしめられ。玉觥に盛る美酒ハ琥珀の色
とるん欺る。酒酣に耳熟て。大内介殿尊意和暢いとく
夕日さゝ河るこのれの下ばしにいるさハに花さゝ
と口弾ましたまふに。羣臣もまた隨意に詩と賦歌と詠ふハ
御輿をそへ奉るふぞあり。る殿ハ廣座を流肝たまひ汝等もけハ
川道遥の伴ふひ和をが定て趣ある佳肴ども携来ぬらん。些
憚らずしてこゝへ出せんまほしさよと仰そるに。人〳〵ハ去ぬる
射獵のこゝさに懲せしもへ今丁目ハぬるほ」と。大家相約るう如く
佩行厨にて来りるが今の嚴旨と承て個々面を着ゐ出せ。半
晌頓口無言て慚愧ぬ。殿ハ長臣どもが所為を御覧たまひて
笑容可掬玉ひしとぞ。人〳〵ハ去の紀殿の什庄も詰たま


大内介殿
猛虎嶺の
麓に射猟
と做しまして

御挙動ハ怪けれど漸内省して。實是今日ハ寛さる川漁の御遊
ゆゑ。趣向せる下物さへ准備せず。剩軍役ゆゑ猪狩ハ出る
如く突兀く打扮そ〳〵ハ悔しくれ。今ようハ兎ゆ角ゆ時宜の
緩急ゆ用心ゆきさいとまうとてものれと羞想て。殿の温和ねる
御徳ゆ化せらるとねん是ハこゝと後話ゆれども筆の序に
記せしものゆうかく閑話ゆ絆ハて原柄ゆ説晩つ。さても
大内介殿ハ簇下を将て猛虎嶺ゆ狩入たゆ。壮佞ども前
を争ひて馳躋る。殿ハ萬般駒澤ゆ指揮のぐ〳〵節制ありて前
日の末牌ゆ下令せたゆ。此日の昧早ゆハ列卒ゆ指まる
界隈の里民ハ〻跑聚峰々谷〻ゆ皷うち躁時々関とた
くりふどて驅逐おとしもへ。扈從の侍ハ器械ともて野猪兎鹿
猿の類と射斃刺斃各勇奮ゆ顯ハしゆる。殿ハ機會ゆ
見てづと山と馳下ゆ。とある小堆き阜ゆ馬をゑらもゑ今朝
御出馬の時と齊し〳〵。那の日輪の金扇を真甲ゆ翳し玉ハ
落さゆる斜曛ゆいさぎゆ耀たり。那処這処ゆ散在ゆる
篝下の衆こもを看て。瞬くうちゆ馳聚。御馬とハ重ゆ簇
擁して真黒ゆ備たるハ。鉄桶よりも堅ゆるべし。初殿の軍配
扇を御額ゆ支たまひて。假意士卒ゆ異風ゆ想せられハ
一時の機變といへものまて。今班軍ゆ臨て。令使を待ずして。
胴勢を頻ゆ集め給ハんとの御試なり。殿ハそれより山口指して帰
せたまへゆ。御後隊の大身衆陸續相退一隊一隊ばく〳〵。初のや
うゆ聊ゆ次叙を乱さず。いと〳〵嚴ゆ見ゆ。さてもそのうち木

綿屋徳兵衛ハ。清軒ガ教ヲ任セ。斤時も早く山口へ趣て
叫屈ぐやと。此日家を出て出村迫来るが。這里の茶店の店
小二とハ親しき友垣なをバ。之よりて寒温を叙しく。兄
伽縷羅院と伴ひたる者の容貌を精く問けるよ。其の
時しも御還の行装拜んと。這の邊の農民ども黙しく集
合来るぬ。店小二も人ヲ誘ハまて出ひく。徳兵衛ハかゝることに
心涼ねバ不管好ヲ跟ヲ隨て村口までいたるこや隄の
左右よハ看人蟻の如くヲ附て尻坐居る。徳兵衛ハ家艱ヲ
纏らひて今日の御狩の巷説も朦朧なをバ。飄然今かく出で
かけるヲ。官道ハ遮行人ヲ車駕果までハ往来るハずと
ふん聞ひきバ只得人叢中ヲ在て熟視居るヲ。早御胴勢
も過完て廻の後ヲ後押の一隊のくと見えしるバ。羣聚の者ハ
四分五落ヲ散るぬ。事有湊巧。荻野祐仙も今日の扈從の
後し在るバ。行次遅て漸只今この處と經過るヲ。彷徨居
たる徳兵衛ガ後背より。徳兵ヲまこそ前日令兄を伴ひたる
人ぞと指教ひ。徳兵衛ハ聞より血眼ヲるて走ヲ。
矢庭ヲ祐仙ガ脇と捉へ和王ハ前ヲ家兄の伽縷羅院と伴
行ぬしガ什庄等の幹ヲて。家兄ハ何處ヲ居侍るや早く
在處ヲ謂ぬよと嚷るヲよぞ。祐仙ハ喫一驚せしら不知状
小假作。你ハ何奴るをバ。余ヲ向て傷觸を做すぞ。我聊ヲる記
得ヲ。誤認ら但ハ風魔るうと力を極めて推跳すヲ。徳兵
衛ハむゝやぶりつゝて放やらず。千濃賊萬騙局ハ二罵合て

互に苦戰最中なるが、山岡玄番允い馬を驅めて押来この光景を看咎めまゝ徳兵衛が罵る詞をなるべくい身の上の大事発まりと即家卒を喝しそふ痴蒼の破隊なる無扶漢駛く細まと令をれば、跟隨ども重壓て條ち徳兵衛を捕て押へ高手小手に網ひげ、猿轡をさゝめさせ、已が胴勢よりう籠て牽せゆく、茶店主人ハこの頭勢を看より肝を銷し、連累てハ齷齪と、足とも空に逃うりう

十九回　のうの虫

秋の夕のたぐ暝に暮て、山岡玄番允ハやうやく已が邸に回直に徳兵衛が内庭に牽出さゝ、呀祐仙共奴が懐裏を撿見よと道祐仙彼と應て、徳兵衛が懐裡を抓探るに、果して一通の文